
古代地中海世界の宗教研究をめぐる動向

—リュプケ『パンテオン』を中心に

松村一男

—Abstract

Professor Jörg Rüpke (1962-) is Professor of Comparative Religion and Permanent Fellow in Religious Studies at the Max Weber Center, University of Erfurt, Germany. He is an authority on the religions of the ancient Mediterranean regions, and has written many books on this topic, including *Pantheon: A New History of Roman Religion*, Princeton University Press, 2018 on which this article mainly focuses and intends to elucidate the academic value of.

The religious situation in the Mediterranean region was very complex even in prehistoric times, judging from archeological discoveries: Greeks, Phoenicians, Etruscans and Romans were trading and at the same time exchanging their religious ideas. The religious situations became more complicated later, through the period of the Roman Republic down to the time of late antiquity. The Roman Empire held a great expanse of territory extending from the British Isles in the west to the Pontic in the east, from Germania in the north to North Africa in the south. In these regions, there were a large number of different kinds of religions: the official state religion of Rome, Emperor worship, many mysteries such as the Dionysiac, Eleusinian, and Mithraic mysteries, as well as Judaism and Christianity.

The history of Roman religions has been a traditional branch of the history of religions since the beginning of the discipline, from Theodore Mommsen, Georg Wissowa, and Walde Fowler of the nineteenth century down to Franz Cumont, Kurt Latte, M. J. Vermaas, and John North in the twentieth century. Professor Rüpke is the inheritor of this honorable tradition. *Pantheon*, Professor Rüpke's book mainly discussed in this article, is the latest overview of the fascinating Roman religious history.

—要旨

本稿はドイツの比較宗教学者・古典文献学者のイェルク・リュプケ (Jörg Rüpke, 1962-) 氏による近年のローマ宗教史の概説『パンテオン』(プリンストン大学出版会、二〇一八年) の紹介を中心とする。リュプケ氏は古代地中海世界についての考古学、歴史学などからの最新の成果を撰取し、ローマ宗教の歴史をイタリア半島の先史時代から説き起こして、その後の共和政期、帝政期、そしてローマ帝国のキリスト教国教化に至って、ローマ宗教の一貫性が終焉を迎える時期までの一千年以上にわたって記述している。

『パンテオン』の学説史上の意義を見極めるには、二つの視座からの本書の位置づけも併せて必要と考えるので、それを最初に行ったのちに、『パンテオン』自体の紹介と検討に入る。位置づけのための視点の一つは、現在の古代地中海世界の宗教史研究の動向の紹介である。ロー

マ宗教史は周辺諸地域の宗教史とともに研究されてこそ、相対化・客観化が可能なので、そうした古代地中海世界の宗教の枠組みでの研究についても触れておきたい。そして第二の視点は、本書以前のローマ宗教史研究がどのようなものであったかの紹介である。これらの視点への言及があってこそ、本書の独自性、革新性がより納得されることになると思われる。

はじめに——ギリシア・ローマ、古典古代世界、古代世界、そして古代地中海世界

ギリシア・ローマ世界は古典古代世界とも呼ばれてきた。西洋世界においては古典（クラシック）とは歴史についていえばギリシア・ローマを意味する概念であったからだ。しかしグローバル化の現代においては、ギリシア・ローマ世界を規範とするような歴史の言説はもはや成立しない。より客観的な用語が求められている。そこでギリシア・ローマを含む「古代地中海世界」として一つの時代・地域・文化複合を考えようとする傾向が出てきた。それでももちろん、問題は多い。時代（古代）といっても何時から何時までとするのか、地域（地中海世界）といっても何処から何処までとするのか、文化複合といってもどのような要素を含めるのか含めないのか、そしてその場合の基準は何か、等々、未解決な問題が山積している。

私は専門家としてではなく、比較研究者としてギリシアとローマの神話と宗教に関心を持ってきた者であり、広汎な考証に基づいて発言できる立場になく、これから述べるのは非専門家の推測に過ぎないのだが、以下に見るような比較的最近のこの分野での研究書群からすると、二一世紀に至り、伝統的なギリシア・ローマ宗教研究ではもはや新たな研究の展開は望めない、新しい視点から研究に方向を変えるべきだ、他の領域の研究者との協同で新しい問題意識や問題点を探ろうという動きが広くあり、その結果、独立していくつかの似たような共同研究が行われたと考えている。

私が以下の自分なりの現代の研究動向について考え始めてから、専門家によるより詳細なこれまでの研究史の回顧と新しい研究動向についての論文があることを知った（Phillips 2007; Rives 2010）。当然ながら取り上げられている研究の数はより多いし、評価もより正確だろう。しかしそれでもすでにどちらも十年以上も前のものであり、最新の状況を述べているとはいいがたい。また、本稿の主眼はイェルク・リュプケの『パンテオン』の位置づけであるし、日本における状況をも含んだものなので、これらの研究史についての論文の存在を指摘し、欧米における研究史の動向全般に関心のある向きにはそちらも参照を願うとして、本稿はそれら論文とは無関係に書き進めた。もちろん、そのことで本稿に生じる欠陥があるとすれば、その責はすべて筆者が負うものである。

さて、広い領域からの共同研究の先駆らしいのが『古代諸宗教』（Johnson ed. 2007）である。第一部は「古代諸宗教の出会い」と題されテーマ別になっていて、1. 古代地中海世界

宗教とは何か、2. 一神教と多神教、3. 儀礼、4. 神話、5. 宇宙論——時間と歴史、穢れ・罪・贖罪・救済、6. 律法と倫理、7. 密儀、8. 宗教間接触、9. 文字記録と宗教、10. 呪術などの論考がある。後半の第二部は「歴史」と題され、1. エジプト、2. メソポタミア、3. シリアとカナン、4. イスラエル、5. アナトリア・ヒッタイト、6. イラン、7. ミノア・ミュケーネ文明、8. ギリシア、9. エトルリア、10. ローマ、11. 初期キリスト教について紹介がある。

それから数年後に出版されたのが、『古代地中海の諸宗教へのケンブリッジ版コンパニオン』という題名の論集 (Spaeth ed. 2013) である。同書は第一部が地域別となっており、1. エジプト、2. メソポタミア、3. シリア・カナン、4. イスラエル、5. アナトリア、6. イラン、7. ギリシア、8. ローマ、9. 初期キリスト教が紹介され、第二部がテーマ別になっており、1. 暴力、2. 同一性、3. 身体、4. ジェンダー、5. 凶像というテーマが論じられている。前書との執筆者の重複はごくわずかである。

興味深いことに、偶然かも知れないが (そうでないかも知れない)、前書と同じ二〇一三年に、同じケンブリッジ大学出版局から、またしても同種の本が『古代世界の諸宗教のケンブリッジ版歴史』という題名で、二巻本で出版されている (Salzman & Sweeney eds. 2013; Salzman & Adler eds. 2013)。こちらは遥かに分量が多く、対象地域もより広く、また内部区分も細かくなっているが、しかし重複していることは間違いない。

一巻目『青銅期からギリシアの時代まで』は四部に分けられており、第一部「メソポタミアと近東」では、1. シュメール、2. アッシリアとバビロニア、3. ヒッタイト、4. ゴロアスター教、5. シリア・カナン、6. イスラエルとユダヤが扱われ、第二部「エジプトと北アフリカ」では7. エジプト、8. フェニキア・カルタゴが扱われる。第三部「ギリシアと東地中海」では9. ミノア、10. ミュケーネ、11. アルカイック期と古典期ギリシアが扱われる。第四部「西地中海とヨーロッパ」では12. エトルリア、13. 共和政初期までのローマ、14. 西および中央ヨーロッパのケルトが扱われる。

二巻目『ギリシアの時代から古代末まで』もやはり四部構成で、ほぼ同じ地域のほぼ同じ宗教について時代的变化が述べられる。ただし地域や宗教によって重要性に変動があるので、同じ地域でも力点が異なっているし、新しい要素として各地でのユダヤ教とキリスト教が加えられている。そしてテーマや時代設定がかなり限定的な論考が増えている。編者の一人アドラーはキリスト教とユダヤ教の専門家なので、ユダヤ教とキリスト教に偏向したテーマ構成は彼の方針によるものだろう。さらにいえば以下の紹介でも分かるように、第二巻目は本稿で注目している地中海世界宗教史という研究方向にはそぐわない、これまでと同じような宗教・地域・時代限定的な論考が目につく。したがって、この巻のユダヤ教とキリスト教の諸論考については、新しい広い視座からの比較研究的な研究という考察対象から除外しておきたい。

第二巻の第一部「イランと近東」では、1. パルティア期とササン朝期のイラン (247 BCE-654 CE)、2. ローマ時代の近東において地域的な宗教アイデンティティを創造すること、3. ヘレニズム期とローマ期のパレスチナにおけるユダヤ教、4. 紀元七〇年以後のユ

ダヤと近東におけるユダヤ教、5. シリアのキリスト教が扱われ、第二部「エジプトと北アフリカ」では、6. プトレマイオス朝とローマ支配のエジプトにおける伝統的宗教、7. エジプトのユダヤ教、8. 古代エジプトのキリスト教、9. カルタゴとローマ化したアフリカの儀礼と信仰、10. ローマ帝国アフリカのキリスト教が扱われ、第三部「ギリシアと小アジア」では、11. ギリシアと小アジアの諸宗教、12. 小アジアでのユダヤ教、13. 小アジアのキリスト教——碑文からの考察、が扱われ、第四部「ローマ帝国期のイタリア、ガリア、スペイン」では、14. 共和政後期から古代末期までのローマとイタリアの宗教、15. イタリアと西ヨーロッパにおけるユダヤ教、16. イタリア半島のキリスト教、17. ローマ帝国ガリア（紀元後一～四世紀）の諸宗教と都市、18. ガリアのキリスト教、19. ローマ帝国スペインの諸宗教、が扱われている。

以上の三書（ただし三冊目の第二巻の一部は考察の対象外）からは、ギリシア・ローマ宗教を他の近隣の多くの地域の宗教と対等に扱おうという意識が鮮明に読み取れる。しかしながら、これほど多くの異なる時代の諸宗教の並置から果たしてどのような新しく有意義な知見が得られるかは別問題である。個別の地域の諸宗教を並べて紹介しても、そこからギリシア・ローマの諸宗教についての従来の知見に何か新しい（しかも役に立つ）ものが付け加えられなければ、試みは評価するが、成果については疑問符で終わってしまう危惧がある。

日本での研究動向

日本においても新しい課題に挑む西洋古典学や西洋古代史の研究者は多い。次にはそうした研究の一端も紹介・検討してみたい。

『古典の挑戦』（葛西&カッツァート編 2021）は海外（主として英国オックスフォード大）の研究者の論考の翻訳も多く含み、現在の西洋古典学の各分野での研究状況を紹介し、日本において今後も西洋古典学のさらなる研究の進展を希望するという意図で編まれている。各自が得意なテーマを執筆するという論文集ではなく、西洋古典学とその関連分野（哲学、法学）の全体的見取り図になるようにはっきりと分野担当が行われているので、何が今後の課題なのかの手掛かりとなるだろう。

ではこの一冊で十分かといえば、そうとはいえない。同書ではまだ扱われていない、より新しい領域もあるからである。これについてはもう一冊の『生き方と感情の歴史学』（南川&井上編 2021）を見ておきたい。同書は西洋古典学ではなく、西洋古代史の研究者たちによる論文集だが、いうまでもなく西洋古典学と西洋古代史は同じ領域を対象としつつ、研究分野と研究手法が異なるだけである。だから双方から生み出される成果が相容れないことはもちろんない。

こちらの本の特徴の一つは、これまで西洋古代史では取り上げられてこなかった「恥、

恋、妬み」といった感情の「深層」を個別ケースについて探ろうという態度である。また第二に、西洋古代史の論集としては対象となっている地域と時代も、ペルシア、ヘレニズム世界、ギリシア、ローマ、ケルト、キリスト教と例外的にかなり広い。

つまり最初に述べた三冊の英文論集と今後の研究の在り方についての意識が共通していると思われる。一つはつながりのある広い地域の例を比較しつつ、その中で独自性を見極めて考えていく態度である。しかし本書はもう一つ、従来あまり論じられてこなかった「感情」というテーマを本格的に広い地域と時代の例の比較によって浮かび上がらせている点が新しいと思われる。

ギリシア宗教と新しい見方

西洋古代の研究は制度史や社会史や文化史など、これまでも新しい視座からの成果を求めてさまざまな試みをしてきた。これまで紹介してきた英語の論集三点、そして日本語の論集二点ももちろんそうした流れに位置づけられる。

ではこうした地域と時代とテーマの拡大の試みを受けて、従来のギリシア宗教、ローマ宗教の研究を書き改める試みはなされてきただろうか。次にそれぞれについて考えてみたい。

ギリシア宗教研究では長年、スウェーデンのニールセンの二巻本の大著がスタンダードであった (Nilsson 1967; 1961)。彼は同書を改定し、線形文字 B の解読、その後のミュケーネ学の発展を摂取して領域の拡大を行った。

しかしその後にアッシリア学とヒッタイト学が急激に進展し、ギリシア文化がオリエントからの大きな影響下に形成されたという見方を強め、この方面の研究が一気に進んだ (Walcot 1966; West 1966)。古代地中海世界という広い視野からの研究が欠かせないというこれまで見てきたような新しい研究態度の出発点はこの時期の新たなギリシア学の展開にあったといえよう。この成果はブルケルトによる新たなギリシア宗教史の大著に組み込まれた (Burkert 1985)。オリエントとギリシアの文化交流を探るこうした流れは現在も進行中であり、現在のヨーロッパ全域にわたるフェニキア人との競合と協力という新しい問題も論じられるようになってきている (Burkert 1992; 2004; Fox 2008; West 1997)。

しかしブルケルトの功績はこれに留まらない。彼は動物行動学というこれまで無関係と思われていた学問分野での知見をギリシア宗教研究に導入することを提唱して、ギリシア宗教を考える際の出発点を旧石器時代にまでさかのぼらせる試みを行ったのである (Burkert 1979。書評、松村 1981)。もちろんこれはブルケルト単独の発見ではなかった。ギリシア宗教の由来の一部を旧石器時代の狩猟民の世界観や習俗に求める研究はスイスの古典学者モイリによるもので (Meuli 1975)、ブルケルトはそこから示唆を受けたのである。

以上、ギリシア宗教研究の視点は地域的にはオリエント、レヴァント、地中海世界全域に広がり、時代的には旧石器時代にまで広がっている。

ローマ宗教の新しい見方

では同じような視野の拡大はローマ宗教研究においても進んでいるだろうか。私は進んでいると思っている。だがその前にギリシア宗教の場合と同じく、研究史の回顧をしておこう。

ギリシアの場合と同じく、ローマ宗教においても遺跡や書物と並んで碑文が主たる史料として重視された。碑文資料では祭事暦 (Fasti) が往時の宗教を推測する資料として重視された。十九世紀以来のそうした成果はヴィソヴァによって集大成され、その資料的価値は現在も失われていない (Wissowa 1912)。ヴィソヴァを改定する試みもラッテによってなされたが (Latte 1960)、こちらは成功したとはみなされていない (書評、Brelich 1961; Michels 1962; Weinstock 1961)。

ギリシア宗教の通史を書くのも困難だが、ローマ宗教史も資料のほとんどない王政期、その後の共和政期、そして帝政期と、キリスト教が国教となって後、西ローマ帝国の後五世紀の滅亡まで、時間的には千年以上になる。歴史的にある程度信頼できる史料、たとえば十二表法 (前四五一年?) のある共和政期からとしても九〇〇年にはなろう。また地域的には都市国家ローマからはじまり、イタリア半島、ギリシア、エジプト、カルタゴ、北アフリカ、そして小アジア、ブリテン島まで領土は広がり、後二世紀の帝政期の最大領土にまでなる。その広大な領土の多様な諸宗教の歴史と相互関係を描く作業の大変さは、ギリシア宗教の場合に劣らないし、むしろそれ以上かも知れない。

ヴィソヴァの集大成後、ラッテの失敗を見た研究者たちは通史を避けて、時期を限定した研究に専念する傾向が強くなった。共和政期の研究と帝政期の研究、そして帝政期中でもミトラス教、エジプト宗教 (サラピスとイシス)、アナトリア宗教 (キュベレとアッティス) という個別専門化が顕著だった。私自身も通史の素描を試みたことがあるが (松村 2020)、自身の非力さを思い知っただけだった (本稿で紹介しているローマ宗教研究の学説史の流れについての諸文献は上記の松村 2020 に掲示してある)。

しかし新しい研究動向を取り入れてローマ宗教の通史に挑んでいるのがドイツのリュプケである。今回、リュプケの研究の中でも詳しく論じるのは、『パンテオン』という大著である。当初は『パンテオン』に絞った紹介と考察を考えていたが、現在の研究の視座がどのように変わってきているかをまず指摘してからの方が同書の革新性をよりよく理解してもらえると考えて現行のスタイルとした。

リュプケ『パンテオン』

イエルク・リュプケ (Jörg Rüpke) はドイツの比較宗教学者・古典文献学者。一九六二年生まれで、現在、エアフルト大学の比較宗教学の教授で、同大付属マックス・ウェーバー・セ

ンターの副所長でもある。彼は二〇一五年にエアフルトで開催された第二十一回国際宗教学会（IAHR: International Association for History of Religion）の開催責任者でもあった。また二〇一九年九月には来日して、東京大学、京都大学、同志社大学等において講演を行い、日本宗教学会の学術大会においても氏の提唱する「生きられた古代宗教」という視座（後述）を巡るパネルにおいて自身の発表の他、他の発表者へのコメントを行った。

リュプケにはもちろんドイツ語での著作が多いが、近年は英語での著作も数多い（Rüpke 2007; ed. 2007; 2008; 2014; 2019; 2020）。その中で今回彼のローマ宗教史研究の特徴を考察するために主たる対象として紹介するのが、*Pantheon: A New History of Roman Religion*, Princeton University Press, 2018 である。日本語タイトルは『パンテオン——新しいローマ宗教史』となろうか。

この著作を中心にリュプケのローマ宗教研究を紹介するには二つの理由がある。第一には比較的最近の著作であること。そして第二にはこれが大著であり、ある意味、リュプケのローマ宗教史研究の一つの総括と思えるからである。題名のパンテオンとは、前二十七年に皇帝アウグストゥスの娘ユリアの婿であったアグリッパ（Marcus Vipsanius Agrippa）がローマのマルスの野（カムプス・マルティウス）に建立させたドーム建築で、ドームの中央は吹き抜けになっている。現存しており、ローマ観光の名所のひとつとなっているが、本来はその名が示すように「万神殿」であった（キリスト教の時代には教会としても用いられ、今もその名残があちこちに見られる）。

本書はすべての神々を祀る万神殿のように、ローマの遡れる最古の時期からキリスト教国教化の時代まで、前九世紀から後四世紀までの千二百年もの間のローマの諸宗教を統一した視点から論述しようとする大変に野心的な著作であり、そこにこそリュプケの構想するローマ宗教史像と古代宗教に対して用いるべきと彼が考える方法論が最も鮮明にうかがえる。

構成は以下のようになっている。

- 第一章 地中海世界宗教史
- 第二章 鉄器時代イタリアにおける宗教メディアの革命——前九世紀から前七世紀
- 第三章 宗教の下部構造——前七世紀から前五世紀
- 第四章 宗教の実践——前六世紀から前三世紀
- 第五章 宗教の行為者による宗教の実践の出現と形成——前五世紀から前一世紀
- 第六章 宗教について語り、書く——前三世紀から前一世紀
- 第七章 分水嶺的アウグストゥス時代における宗教の倍増化——前一世紀から後一世紀
- 第八章 生きられた宗教——後一世紀から後二世紀
- 第九章 新しい神々——前一世紀から後二世紀
- 第十章 専門家と供給者——後一世紀から後三世紀

第十一章 観念上の共同体と現実の共同体——後一世紀から後三世紀

第十二章 共同体の境界とその様式——後三世紀から後四世紀

第十三章 エピローグ

注

文献リスト

索引

この構成については著者自身が第一章末で簡単にそれぞれの要旨を記しているの、その部分を訳出しておこう (pp.22-23)。

最初に検討するのは地中海とイタリア半島、そしてイタリア中部とエトルリアの諸地域である。鉄器時代の宗教実践がどのようなものであったかを確認する (第二～四章)。その後ようやくローマの共和政中期と後期 (第五、六章)、そしてアウグストゥス期 (第七章) へと話は進む。しかしこれらの章の各所で明らかにするように、ローマは決して孤立してはいなかった。なぜならローマは他のイタリア半島中央部の諸都市国家や地中海周辺の諸国との交流と競合の関係にあったからだ。そのため我々は帝政期初期の宗教実践から始めて、次第に対象の範囲を拡大していく (第八章)。多くの宗教的なしるしの発展が認められる (第九章)。また、宗教的専門知識や権威の増大も認められる。それらは地中海世界全域の枠組みの中でのみ正しく理解することができる。そして人々や物品や知識の交流もローマ帝国の繁栄がもたらしたのである (第十章)。この広い対象領域は、自己の認識、個人と地域集団の自己定位において極めて重要となり、古代末期に至るまで人々の宗教観念や宗教実践に影響を与え続けた (第十一、十二章)。さて、本書の論述は四世紀半ばで終わる。ローマ宗教の終わりや、キリスト教集団の特権化や、イスラームの広がりをもって終わらせたのではない。この終点は、本書で取り上げた種々の実践、観念、制度が歴史の流れの中で経験した多くの変遷の到達点なのであり、現在、世界中で「宗教」という概念と連動している現象を形成しているのだ。とはいえ、エピローグ (第十三章) では、四世紀にはまだ状況は流動的であったことを示そうとした。それから後に起こった歴史とは、必然的というより、かなり偶発的であったと思われる。

以下、それぞれの章の内容をより詳しく示しながら、その後に本書がこれまでの同様のローマ宗教史概説とどの点で異なり、新しい展開を示しているかを述べてみたい。なお、私の概要は、上記のリュプケ自身による各章についての要約とできるだけ重複しないように進めたい (章、節、小見出し。カッコ内はページ)。

第一章 地中海世界宗教史 (1-23)

- 1 地中海世界宗教史とは何を意味するか (1-5)
 - 2 宗教 (5-10)
 - 3 宗教力の諸相 (11-21)
 - 宗教エイジェンシー (11-13)
 - 宗教アイデンティティ (13-15)
 - 宗教交流 (15-21)
 - 4 個人の水準での戦略としての宗教 (21-23)
- 第二章 鉄器時代イタリアにおける宗教メディアの革命——前九世紀から前七世紀 (24-54)
- 1 特別なもの (24-28)
 - 初期鉄器時代の宗教——方法論的考察 (26-28)
 - 2 地中海域における青銅器時代から鉄器時代への移行 (28-34)
 - 空間 (28-30)
 - 発達のモデルとその結果 (30-34)
 - 3 儀礼としての埋蔵 (35-39)
 - 4 埋葬 (39-47)
 - 5 神、像、饗宴 (47-54)
 - 像 (48-51)
 - 神殿と宗教的差異化 (51-54)
- 第三章 宗教の下部構造——前七世紀から前五世紀 (55-82)
- 1 神々の家 (55-63)
 - 刷新 (57-60)
 - 投資 (60-63)
 - 2 神殿か、祭壇か (63-73)
 - 宗教共同体 (64-73)
 - 3 紀元前六、五世紀における変容 (73-82)
 - 宗教における投資 (79-82)
- 第四章 宗教の実践——前六世紀から前三世紀 (83-108)
- 1 身体の活用 (83-95)
 - 誰の頭部なのか (83-87)
 - 会話の持続 (88-92)
 - 請願 (92-95)
 - 2 聖化 (95-99)
 - 分類 (95-96)
 - 戦略 (96-99)
 - 3 複雑な諸儀礼 (99-103)

曆 (101-103)

4 物語と像 (103-108)

第五章 宗教の行為者による宗教の実践の出現と形成——前五世紀から前一世紀

(109-157)

1 階層と貴族制 (109-115)

2 神官団 (115-122)

ウェスタの処女たち (116-118)

ポンティフェックスたちと鳥占い官 (119-122)

3 区分 (122-130)

神官というキャリア (122-126)

神殿の建設 (126-130)

4 饗宴文化 (130-136)

バッカス (134-136)

5 大規模交流 (136-151)

見世物 (136-141)

戦争 (141-146)

ローマの戦争 (146-151)

6 神的存在 (151-157)

鳥占い (152-156)

市民宗教 (156-157)

第六章 宗教について語り、書く——前三世紀から前一世紀 (158-182)

1 儀礼のテキスト性 (158-163)

エトルリアの教え (160-163)

2 自己と他者の観察 (163-172)

神話と神話批判 (166-172)

3 システム化 (172-182)

史料編纂と法令 (173-177)

「宗教」 (177-182)

第七章 分水嶺的アウグストゥス時代における宗教の倍増化——前一世紀から後一世紀

(183-210)

1 刷新としての復古 (183-196)

アウグストゥス (185-186)

ネットワーク (187-192)

儀礼 (192-195)

宗教の縮減 (195-196)

2 空間の中の宗教 (196-200)

- 神殿建築 (196-200)
 - 3 宗教の二重化 (201-210)
 - コイン (202-203)
 - 像と暦 (203-205)
 - テキスト (205-208)
 - 反応と思索 (208-210)
- 第八章 生きられた宗教——後一世紀から後二世紀 (211-261)
 - 1 世界との関わりの中での個人 (212-216)
 - 2 家庭と家族 (216-223)
 - 品々の組み合わせ (218-223)
 - 3 宗教を学ぶ (224-226)
 - 4 宗教が体験される場所 (226-247)
 - 寝室 (228-229)
 - 庭 (229-234)
 - 墓 (234-237)
 - 墓の建設計画 (237-247)
 - 5 家庭の神々 (247-255)
 - ラーレス (250-255)
 - 6 家庭の祭儀よりも生きられた宗教 (255-261)
- 第九章 新しい神々——前一世紀から後二世紀 (262-295)
 - 1 背景 (262-264)
 - 2 イシスとセラピス (264-272)
 - 3 アウグスティ——イニシアティブ (272-289)
 - 諸制度 (275-282)
 - コントロール (283-285)
 - 存在と不在 (286-289)
 - 4 自己 (289-292)
 - 5 要旨 (292-295)
- 第十章 専門家と供給者——後一世紀から後三世紀 (296-326)
 - 1 宗教的権威 (296-300)
 - 2 男女の専門家たち (300-307)
 - 3 「公的」な祭司と宗教の刷新 (307-310)
 - 4 女預言者たちと幻視者たち (310-313)
 - 5 宗教の創設者たち (313-319)
 - 6 変化 (319-326)
- 第十一章 観念上の共同体と現実の共同体——後一世紀から後三世紀 (327-363)

- 1 テキスト共同体 (329-339)
 - テキストを通じてのグループ形成 (332-336)
 - 宗教のテキスト化 (336-339)
 - 2 語り (340-348)
 - 語りの枠組みとしてのローマ帝国 (341-343)
 - 伝記という図式 (343-345)
 - 漫然とした多様性とネットワークの広がり (345-348)
 - 3 歴史化とキリスト教の起源 (348-358)
 - ユダヤ的文脈 (349-354)
 - キリスト教の発明 (355-358)
 - 4 宗教体験と自己同一性 (358-363)
- 第十二章 共同体の境界とその様式——後三世紀から後四世紀 (364-385)
- 1 宗教知識の市場価値 (364-369)
 - 2 政治的行動者たち (369-377)
 - 支配的な関心 (371-377)
 - 3 差異の取り扱い (377-382)
 - 聖書叙事詩 (380-382)
 - 4 競合する場面 (382-385)
- 第十三章 エピローグ (386-390)
- 注 (391-437)
- 文献リスト (439-533)
- 索引 (535-551)

ページ数が内容を必ず反映するとはいえないが、それでもどの章、どの節、どの小見出しにページが割かれているかを見ておくことは、リュプケの関心の所在を知る手がかりになるだろう (カッコ内の数字はページ数)。

章で長いのは第八章「生きられた宗教——後一世紀から後二世紀」(51)、次が第五章「宗教の行為者による宗教の実践の出現と形成——前五世紀から前一世紀」(49)である。人々が実感する宗教としての「生きられた宗教」を描きだそうというのが、本書がこれまでの概説書と異なろうと目指している視座なのだから、その章が最も長くなるのは当然なのだろう。そして第五章は副題の時期が四世紀と長い。リュプケはこの時期にローマ宗教の骨格が形成されたと考え、そのことを多くの資料によって説得的に示そうとしているのだろう。

節で長いのは第八章4節「宗教が体験される場所」(22)、第九章3節「アウグスティ——イニシアティブ」(18)、そして第五章5節「大規模交流」(16)の順である。ただ節の場合には小見出しが数多く含まれていると当然、節が長くなる。しかし、やはりそれはそ

の節の中に関連する個別問題を組み込む必要があるからそうなるのであって、節自体の重要性を示していることに変わりはない。第八章4節と第五章5節は、重要なので長い章となっている第八章、第五章の中でも、それぞれ最も重要な部分なので、節として多くの要素を含み、長くなっているのである。場所、アウグストゥスによる宗教の復活と刷新、そしてローマ帝国内での宗教交流が取り上げられている三つの節のいずれもローマ宗教史の形成において極めて重要な要素であり、多くのページが割かれるのももっともである。

小見出しで長いのは、第八章4節3「墓の建設計画」(11)であり、それに続くのは第三章2節1「宗教共同体」(8)、第九章3節1「諸制度」(8)、第十二章2節1「支配的な関心」(8)、そしてその次が第一章3節3「宗教交流」(7)、第六章2節1「神話と神話批判」(7)であった。

なお、こうしたページ数による重要性の判断については、図版ページを考慮していないという批判があるかも知れない。しかし図版が多く入れられているのなら、それもまた重要性の指標であろう。図版を外してページ数を数える方がより客観的になるかは主観的な判断になるのではないだろうか。

従来のローマ宗教史概説との違いと新しさ

まとめとして、私が本書の新しさ、独自性と思う要素について項目に分けて述べてみる。

1 長大な歴史的視座

従来の概説と何よりも異なるのは、前九世紀のイタリア半島を含む地中海世界の青銅期時代や鉄器時代の宗教状況から論述を始めていることだろう。「ローマ」が成立する以前についても考古学によって明らかになった宗教的風土はその後の「ローマ」との連続性がある以上、無視しないということだろう。それはつまりギリシアやフェニキアやエトルリアとの関係も本書では取り上げられているということである。これまた従来の類書にはない特徴である。

そして本書の終章は紀元後四世紀半ばで終わる。キリスト教の国教化である。しかし本書はキリスト教の本ではない。あくまでもローマの諸宗教の歴史（とその相互関係）がテーマである。キリスト教もユダヤ教もミトラス教やイシス崇拝と同様に特別扱いなしに取り上げられている。後四世紀にはキリスト教の占める位置が大きくなっている。しかし伝統的な多神教の神殿は存続していたし、そこでも儀礼が行われていたのだ。

つまり本書は類書に比べてカバーする時代と地域が圧倒的に広い。そのことはリュプケ自身による本書以前の多様な領域での研究の蓄積があっただけでなく、はじめて可能であったのだろう。また現代において多くの研究者による多様な個別研究の蓄積があり、それを利用できたことも力があつたに違いない。百頁近く (pp. 439-533) あって約千もの文献がリスト化されている本書の膨大な文献リストがそのことを示している。

本書の包括さはそれ自体に留まるものではなく、地中海世界でのその後が続く時代をも見据えていると思われる。本書の先にはいわゆる古代末期やビザンツ帝国、イスラーム、西洋中世が控えているのだ。それらの起源について考えるに際しても本書を無視することはできないだろう。

2 複数の視座

本書のテーマは宗教史だが、リュプケは宗教の理解のためにはさまざまな要素の関係性の網の中での理解が必要と考えており、政治的、社会的、経済的な側面も重視している。政治形態の変化が宗教に影響を及ぼすことは論を俟たない。単独の都市国家、都市国家連合、そして帝国、帝国の分断という政治的な変化は王、護民官、元老院、皇帝、軍人という指導者・支配者層の変化とも連動しているし、その結果、公的に開催される宗教儀式(供犠を含む)、公的な神殿や祭壇、神官団の構成などにもつながっている。国家の規模の変化は都市化を生じさせ、各地の中核都市ばかりでなく、ローマやアレクサンドリアのようなメガロポリスも生み出した。この都市化は人々の生活形態にも精神生活にも変化を引き起こす。

また領土の拡大には戦争がつきものであり、それは多くの奴隷を生み出した。ローマの文化も宗教も奴隷制を基盤としており、その存在を抜きにしては考えられない。また多様な専門的職業集団も生じた。それらは同時に宗教集団でもあった。経済活動、交易、人々の移動といった社会的側面の変化もやはり宗教の変化をもたらすのである。したがって本書の論述は、「伝統と革新」あるいは「持続と変容」という二つの要素の関係の変化の記述を骨組みとすることになる。

あるいはそこに「理念と実践」という二要素の対比も追加してもよいかも知れない。どの段階においても理念があったはずであり、それがどのように実践されたかの確認という視座から本書を読むことも可能と思うからである。

3 新しい用語と「生きられた古代宗教」

本書の斬新さの一環として従来の日本のローマ宗教史の記述では見られないような用語による分析が目立つ。それはローマ宗教史を他の宗教、たとえば現代宗教と同じ水準で理解してみようという態度による。したがって、以下のような単語が頻出する。このことはローマ宗教史を世界の諸宗教の中で孤立させないためにも望ましい態度だと思うが、日本語訳が行われる場合にはカタカナでは字数を取るの、節約のために漢字による訳語を用いることになるだろう。例としては、communication, agency, ability, competence, creativity, actors, systematizer, systematization, networks, project, mediatization, monetization, acoustic enhancement, invocation, lived religion, media, assemblage of practices, risk-management strategy, encomium, end users などである。

伝統的なローマ宗教史に新しい視座を持ち込むことは容易ではない。二つのヘテロな要

素を共存させねばならないからだ。従来の概説書と同じデータは欠かせない。それなしには本書も成立しない。しかしそれだけでは従来と変わりが無い。そこに導入されたのが新しい用語による従来の解釈のリノベーションである。

そしてもう一つの新機軸が、より生身の感覚を与えるための「生きられた古代宗教」(LAR, Lived Ancient Religion) という視座であった。一言でいえば、それは人々が宗教をどのように生きていたのかをより実感できるような史料や解釈にシフトしようという提言である。宗教制度や宗教思想も大事だが、しかし人々が毎日、どのような宗教を信じ、どのような礼拝行為をしていたのかをもっと具体的に知ろうという態度である。

その結果として、限られたエリート層ではなく、それ以外の人々(商人、職人、軍人、女性、子供、貧民、異邦人、奴隷、解放奴隷)などの宗教についても史料を探してその宗教生活を知らうという方向性が本書には見られる。その史料としてポンペイの私邸の壁画や各地出土の小像や祭具などが使われている。それらの図版はこれまでの概説書には見られないものである。

しかしこうした革新と従来の保守的ローマ宗教の記述は水と油のようで、必ずしもしっかりと溶け合っていないと感じられる場合も散見する。ただし「生きられた」宗教の感覚を還元しようというこの試みは否定されてはおらず、これまで出されている書評を見ても、今後への期待の声がむしろ大きい(Bonnet 2019; Gvaryahu 2019; Last 2019; Szabo 2020)。

4 本書の特徴の補足

最期に補足としてさらにもういくつか、従来の概説書と大きく異なる特徴を付け加えておきたい。一つ目は、本文にも注にも他の研究者の業績や理論についての言及がほとんどないことである。いわゆる学説史がないのだ。単にそれに割くスペースがなかったということかも知れないが、それよりも新しいタイプであることの表明と受け取りたい。本書は従来の概説書とは異なる視座から書かれているので、むしろ研究史の回顧は必要ない(あるいは邪魔)という著者の自信の現われかも知れない。

こうした従来の形式に囚われないユニークさはこれ以外にも多い。第二に、神々それぞれについての記述はほとんどない。ユピテル、ユノ、ミネルヴァ、マルス、という伝統的な神々はもちろん、ミトラス教、ユダヤ教、キリスト教についても実質的な記述はほとんどない。一般的に多く紹介されるような神々の姿、供犠、神殿などの写真やイラストはほとんどない。前述の伝統的な神々はもちろん、ミトラス像とその神殿、ユダヤ教やキリスト教関係の写真もわずかである。加えて、これまでの概説書にあるような年表とか地中海域、イタリア半島、王政期・共和政期・帝政期それぞれのローマなどの地図は一切ない。「七つの丘」も「四角いローマ」も無視されている。

従来の概説書に掲載されているような写真、図表、地図はネットで見ればよいということなのかも知れない。しかしそれでも本書には64点の写真・図版が掲載されている。つまり従来とは異なる種類の図版が選ばれているのだ。そこにはリュプケのメッセージが込め

られているはずだろう。どのような種類のものが選ばれているか見ておこう（カッコ内は章、節、小見出し。これによりリュプケがどのような問題について図版を示すのが本書のためと考えているかが伺える）。

- 1 マルタ島の新石器時代の神殿 (2.2.1)
- 2 エトルリア、ヴルチの骨壺 (2.4)
- 3 エトルリア、カエレ地方の墳墓 (2.4)
- 4 エトルリアの手桶の図像 (2.5.1)
- 5 エトルリアの石像 (2.5.1)
- 6 エトルリアの建物復元図 (2.5.2)
- 7 権威の象徴としての先端が曲がった杖（リトゥス） (2.5.2)
- 8 リトゥスと伝説的の第二代ローマ王ヌマの描かれたコイン (2.5.2)
- 9 ローマ近郊の町サトリクムのアクロポリス復元図 (3.1)
- 10 初期ギリシア神殿のテラコッタ製の模型 (3.1.1)
- 11 ゴルゴンの顔が彫られた神殿の破風瓦 (3.1.2)
- 12 レリーフのある石柱 (3.2.1)
- 13 エトルリアの小祭壇 (3.2.1)
- 14 騎馬した武装兵のレリーフがあるテラコッタ製の飾り版 (3.3.1)
- 15 ほぼ等身大のテラコッタ製の婦人像 (4.1)
- 16 エトルリアで製作されたテラコッタ製の腸と子宮の模型 (4.1)
- 17 敬虔女神（ピエタス）が描かれたコイン (4.1.1)
- 18 エトルリアの墳墓の壁画 (4.4)
- 19 ローマの祭壇での供犠の様子浮彫 (5.1)
- 20 供犠に参加する少年の姿のブロンズ製小像 (5.1)
- 21 ウェスタの処女の浮彫 (5.2.1)
- 22 ローマのフォルム・ボアリウムにあるヘラクレス神殿 (5.3.2)
- 23 ローマ、フォルトゥナ女神の円形神殿 (5.3.2)
- 24 前一世紀の硬貨三種、キュベレ、ケレス、鼎 (5.5.1)
- 25 供犠の行列 (5.5.2)
- 26 ティトゥス凱旋門（部分）、メノラーを含む戦利品の顕示 (5.5.3)
- 27 ブロンズ製の肝臓の模型、エトルリア、前二世紀 (6.1.1)
- 28 前二千年紀、メソポタミアの羊の肝臓の模型、楔型文字が書かれ、占い用と思われる (6.1.1)
- 29 前520年頃のギリシアの壺絵、トロイを脱出するアイネアスの一家 (6.2.1)
- 30 ローマ、デア・ディア女神神殿の平面復元図 (7.1.2)
- 31 後一世紀、世紀祭を祝ってドミティアヌス帝が発行した硬貨 (7.1.3)

- 32 ローマ、アポロ神殿の浮彫 (7.2.1)
- 33 「平和の祭壇」アラ・パキス・アウグスタエ (7.2.1)
- 34 ババリア出土のフォルトゥナ女神のブロンズ製小像 (8.2.1)
- 35 多くの祭壇の浮彫がある、ドイツ中部ゴータ出土のテラコッタ製貯金箱、帝政期、(8.2.1)
- 36 ポンペイの私邸の庭 (8.4.2)
- 37 ポンペイの私邸の壁画に描かれたファウヌスとバッカスの信女 (8.4.2)
- 38 ポンペイの私邸の壁画に描かれたピグミーのいるエジプトの風景 (8.4.2)
- 39 ローマ、銀行家の墓、後一世紀後半 (8.4.4)
- 40 ローマ郊外の墓地、後一～二世紀 (8.4.4)
- 41 ローマ郊外の集団墓地の壁画に描かれた遊ぶ子供たち、後二世紀後半 (8.4.4)
- 42 ローマ郊外の集団墓地、後一世紀 (8.4.4)
- 43 ローマ、大理石製の石棺、ヨナが呑み込まれる聖書の場面の浮彫、後三世紀 (8.4.4)
- 44 ポンペイの私邸の壁画、祭壇の礼拝場面、後一世紀 (8.5.1)
- 45 宗教儀礼の場面を描いた大理石浮彫フリーズ、ローマ、後一世紀前半 (8.5.1)
- 46 祭壇に向かい礼拝する人が浮き彫りになっているテラコッタ製ランプ、後一世紀 (8.6)
- 47 ポンペイの私邸の壁画、祭壇に捧げられる牝鹿、後 63-79 (8.6)
- 48 両脇にライオンを従えたキューベレの浮彫のある帝政期のランプ (8.6)
- 49 セラピスの姿のある金製の指輪 (8.6)
- 50 イシス女神の男女の神官が描かれたポンペイの壁画、後一世紀 (9.2)
- 51 イシス女神の祭祀で用いられたブロンズ製のガラガラ (9.2)
- 52 イシスとセラピス崇拝の様子を描いたヘルクラネウム (エルコラーノ) の壁画、後 62-79 (9.2)
- 53 ローマ、大理石製のイシス祭壇、後二世紀半ば (9.2)
- 54 ハドリアヌス帝の妻の神化 (アポテオシス) の場面の大理石製浮彫、後 138 (9.3.1)
- 55 チュニジア、エル・ジェムのローマ遺跡の円形競技場、後三世紀 (9.5)
- 56 ポンペイの私邸の壁画、魔術師が旅行者に何か渡している、後一世紀 (10.2)
- 57 銅製の笛 (アウロス)、後二～三世紀 (10.2)
- 58 香を焚く平皿を持つ女性のブロンズ製小像、後一世紀 (10.2)
- 59 キュベレとアッティスの勝利を描く浮彫のある銀メッキされた平皿、後四世紀 (10.4)
- 60 牡牛を殺すミトラス神の祭壇浮彫、後三世紀 (10.5)
- 61 ミトラスのさまざまな場面が浮き彫りにされたミトラス神殿の砂岩のレリーフ、

後二世紀後半 (10.5)

- 62 ドゥラ・エウロポスのシナゴグの壁画、アロンが描かれている、後 244/45 (10.6)
- 63 バルカン半島で製作されたと思われる銀製の水差し。トロイ戦争をテーマとした浮彫。前一世紀後半 (11.1)
- 64 ブロンズ製のサバジ奥斯神を象徴する手、帝政期、全身像を避けたと思われる (11.3.1)

図版の数は、第二章は 8、第三章は 6、第四章は 4、第五章は 8、第六章は 6、第七章は 4、第八章は 16、第九章は 6、第十章は 7、第十一章は 2 となる。第二章と第三章は文献史料がない、考古学的出土品によって推測する時代を扱っているのも、必然的に図版が多くなっている。しかし全体としてみれば、図版は家庭、家族、寝室、庭、墓、家の神々という「生きられた宗教」を論じる第八章が圧倒的に多い。リュプケが本書のどこに最も力を入れているかは図版の数からも明白である。

おわりに

「ローマ」という国家の理念・理想が「ローマ人」をして、イタリア半島中部ティベレ川のほとりから始まった都市国家を地中海全域そして東欧や近東や大西洋のブリテン島までを領土とするような大帝國へと拡大させた。その拡張の歴史において、「ローマ宗教」とは現実と理想 (cosmos & eternity) の折り合いのつけ方のシステム (体系化) であったと考えたい。ローマの現実が変わっていく以上、その現実に合わせてローマ宗教も変らねばならなかった。大帝國になった時、現実が多様化・多極化した。そのためローマ宗教もまた多様化・多極化しなければならなかった。伝統的なローマ宗教の誕生、発展、維持、再興、衰退、変容、そしてキリスト教の台頭と主役の交代など、ローマ宗教史とはそうした変化の諸相をどれだけ具体的・実証的・説得的に描き出せるかで評価されるものだろう。そしてこれまで示してきたように、リュプケの『パンテオン』はそうした課題を見事に達成していると思われるのである。

さて、『パンテオン』で一つのローマ宗教についての個人的全体像を提示したリュプケだが、この書以降にはどのように新たな研究を展開しているだろうか。新しい研究テーマとして書かれた『ローマにおける戦争と平和』(2019) と『都市宗教』(2020) を通してこの点を考えてみたい。

『パンテオン』での全体像を再検討し、それぞれの問題への理解をより深化させるには、これまでとは違った視点を持って同じ資料を再度解釈してみるのが一つの選択肢だろう。ローマが一都市から大帝國にまで拡大する過程は戦争の連続であった。では戦争において宗教はどのような役割を果たしてきたのだろうか。この問いを中心に据えると、多くの要

素が戦争と関わっていることに改めて気づく。もちろん、戦争に固有の宗教儀礼があるし、また戦争に特化した神官もいるが、普段は戦争とは直接関係のない道路や女性や物流管理 (logistics) などの要素も戦争の場合には平素と異なる特別な意味を帯びる。また、兵士にどのような宗教が人気であったのかについても考えねばならない。

『ローマにおける戦争と平和』が特定テーマの深化の方向性を持つのと対照的に、『都市宗教』の方は、現代の世界についての問題意識からローマ宗教を考え直そうという試みである。現代社会では世界全体において都市化が進行しているし、この動きは押しとどめられるものではない。そしてローマについてはこうした都市化の古代におけるもっとも詳しい資料があり、そしてローマは現代社会の都市化ともっとも直接につながっている例である。こうしたことを踏まえ、リュプケは「都市化が宗教にどのような影響を及ぼすか」というテーマの現代との最良の比較例としてローマを取り上げているのである。なお同書にはその内容を要約した論文があり、日本語訳もある (リュプケ 2021)。

これら二書は分量的には、前者で『パンテオン』の約六割、後者では約四割程度である (361 頁と 239 頁)。これからさらに研究が進められると思われる。これらのテーマをリュプケがどのように進めていくか、あるいはまた更なる新しいテーマで研究の展開を図るか、これからも彼の研究を注視していきたい。

—— 参考文献 (本文中で列挙したものは含まれていない、日本語は五十音順)

- Bonnet, Corinne 2019. *Coping with Pantheon, Religion in the Roman Empire* 4, 113-119.
- Brellich, Angelo 1961. *Bibliografia, Un libro dannoso: la Römische Religionsgeschichte di Kurt Latte, Studi e Materiali di Storia delle Religioni* 32, 311-354.
- Burkert, Walter 1979. *Structure and History in Greek Mythology and Ritual*, University of California Press.
- Burkert, Walter 1985. *Greek Religion: Archaic and Classical*, Basil Blackwell.
- Burkert, Walter 1992. *The Orientalizing Revolution: Near Eastern Influence on Greek Culture in the Early Archaic Age*, Harvard University Press.
- Burkert, Walter 2004. *Babylon, Memphis, Persepolis: Eastern Contexts of Greek Culture*, Harvard University Press.
- Fox, Robin Lane 2009. *Travelling Heroes: Greeks and their Myths in the Epic Age of Homer*, Penguin Books.
- Gvoryahu, Amit 2019. *Review of Pantheon, Ancient Jew Review*, Sept.9. [book-note-pantheon-%20ancient-jew-review.pdf](#) (accessed 2021. Oct. 22)
- Johnson, Sarah Iles ed. 2007. *Ancient Religions*, The Belknap Press of Harvard University Press.
- Last, Richard 2019. *Reivew of Pantheon, Mouseion* 16, 535-539.
- Latte, Kurt 1960. *Römische Religionsgeschichte*, C. H. Beck.
- Meuli, Karl 1975. *Gesammelte Schriften I-II*, Schwabe & Co. Verlag.
- Michels, Agnes Kirsopp 1962. *review of Kurt Latte, Römische Religionsgeschichte, American Journal of Philology* 83, 434-444.
- Nilsson, Martin P. 1961. *Geschichte der griechischen Religion II: Die hellenistische und römische Zeit*, C. H. Beck.
- Nilsson, Martin P. 1967. *Geschichte der griechischen Religion I: Die Religion griechenlands bis auf die griechische Weltherrschaft*, C. H. Beck.
- Phillips, C. Robert 2007. *Approaching Roman Religions: The Case for Wissenschaftsgeschichte*, in Rüpke ed. 2007, 10-28.
- Rives, James B. 2010. *Graeco-Roman Religion in the Roman Empire: Old Assumptions and New Approaches, Currents in*

Biblical Research 8, 240-299.

- Rüpke, Jörg 2007. *Religion of the Romans*, Polity Press.
- Rüpke, Jörg ed. 2007. *A Companion to Roman Religion. Blackwell Companions to the Ancient World*, Blackwell.
- Rüpke, Jörg 2008. *Fasti sacerdotum: A Prosopography of Pagan, Jewish, and Christian Religious Officials in the City of Rome, 300 BC to AD 499*, Oxford University Press.
- Rüpke, Jörg 2014. *Religion: Antiquity & its Legacy*, I. B. Tauris.
- Rüpke, Jörg 2019. *War and Peace at Rome*, Steiner.
- Rüpke, Jörg 2020. *Urban Religion : A Historical Approach to Urban Growth and Religious Change*, De Gruyter.
- Szalman, Michele Renee & Marvin A. Sweeney eds. 2013. *The Cambridge History of Religions in the Ancient World: Volume I: From the Bronze Age to the Hellenistic Age*, Cambridge University Press.
- Szalman, Michele Renee & William Adler eds. 2013. *The Cambridge History of Religions in the Ancient World: Volume II: From the Hellenistic Age to Late Antiquity*, Cambridge University Press.
- Spaeth, Barbette Stanley eds. 2013. *The Cambridge Companion to Ancient Mediterranean Religions*, Cambridge University Press.
- Szabo, Csaba 2020. Review of *Pantheon*, *Journal of Ancient History and Archaeology* 7, 191-195.
- Walcot, Peter 1966. *Hesiod and the Near East*, University of Wales Press.
- Weinstock, Stefan 1961. reviews and discussions, Kurt Latte, *Römische Religionsgeschichte, Journal of Roman Studies* 51, 206-215.
- West, M. L. 1966. *Hesiod. Theogony*, Oxford University Press.
- West, M. L. 1997. *The East Face of Helicon: West Asiatic Elements in Greek Poetry and Myth*, Clarendon Press.
- Wissowa, Georg 1912. *Religion und Kultus der Römer*, C. H. Beck.
- 葛西康德・ヴァネッサ・カッツァート編 2021 『古典の挑戦——古代ギリシア研究ナビ』知泉書館
- 松村一男 1981 書評：Walter Burkert, *History and Structure in Greek Mythology and Ritual*, 『宗教研究』249, 91-95.
- 松村一男 2020 古代ローマにおける神々の戦争、『東京大学宗教学年報』37, 19-39
- 南川高志・井上文則編 2021 『生き方と感情の歴史学——古代ギリシア・ローマ世界の深層を求めて』山川出版
- リュプケ、イェルク（中西恭子訳）2021 都市的宗教：歴史的視座から見る宗教と都市、『一神教学際研究』（同志社大学）16, 53-74.